

(3) 中村西中学校

学 校 長 小野川 憲
校内研究代表者 沼瀬 美喜

1. 研究主題 「見方・考え方ははたらかせ思考を深める授業づくり」

2. 主題設定の理由

令和4年度の高知県学力定着状況調査の結果を分析したところ、複数の情報から必要な情報を読み取り取捨選択し活用する力や条件に合わせて的確に解答する等の課題が明らかとなった。このような課題から、既習事項や経験値とつなげながら思考を深め、情報を取捨選択する力を身に付けるための授業や生徒が自分で疑問を持ち、自ら思考を深めていくための課題設定が不十分であることを全教員で確認した。そこで、研究主題を昨年度から継続し、「見方・考え方ははたらかせ思考を深める授業づくり」とした。生徒が主体となり思考力・判断力・表現力を身につけるために、生徒が自ら考えたい課題設定についてさらに研究を進めるとともに、生徒の授業の振り返りをイメージした授業づくり、振り返りの共有、縦・横のライン機能を生かしたカリキュラム・マネジメントの強化を行う等の取り組みを通して、生徒の思考力・判断力・表現力を向上させたいと考え、本研究主題を設定することとした。

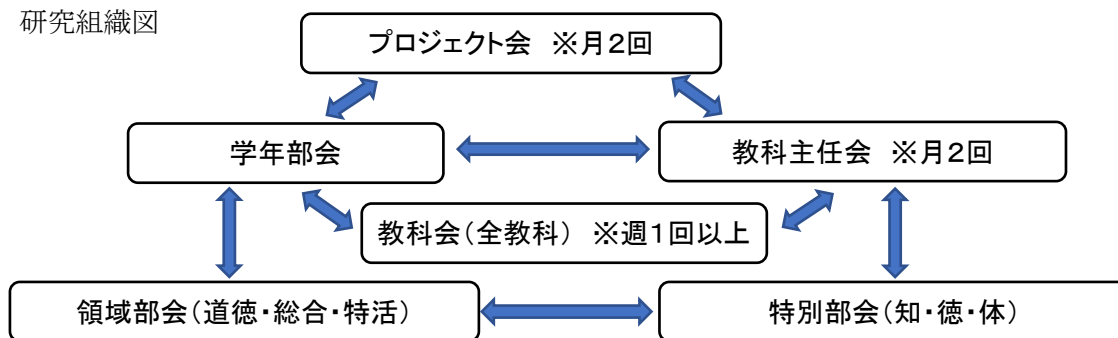
〔研究仮説〕

仮説1：生徒が考えたいと思う課題（必然性のある課題や他者と協働することによって解決できる課題）を工夫して設定すれば、授業に対話や議論が生まれ、生徒の思考力・判断力・表現力が高まるだろう。

仮説2：対話や議論を通して広がったり深まったりした自分の考えを振り返りとして表出させることにより、一人一人の思考の高まりや深まりを自覚させることができ、深い学びにつながるだろう。

3. 研究の進め方と方法

(1) 研究組織図



(2) 研究内容

I 授業研究を中心とした授業改善

- ・ 全校公開授業研究（年6回）
- ・ 授業づくり講座の開催（社会科）、授業づくり講座への参加（5教科）
- ・ 授業スタンダードに基づいた授業者の心構え自己チェック（月1回）
- ・ 授業評価アンケート（学期に1回）
- ・ 授業実践レポート（教科会で1本）
- ・ 講師招聘（斎藤一弥先生、中嶋洋一先生）による授業研通覧（本年度3回通覧実施）

II 効果的なタテ持ちの教科経営

- ・ 教科主任会（月2回）
- ・ 教科会（週1回以上）
- ・ 授業を見合う取り組み（月1回）
- ・ チーム会の実施（ミドル会・メンター会）

・アドバイザー訪問（年3回）

4. 研究実践

（1）授業研究を中心とした授業改善

①全校研（年6回）、授業づくり講座（2回）

今年度は全校研6回、そして、授業づくり講座で1回の公開授業を行った。本校の取り組みとして、全校授業研の前には、「授業の見方」を配っている。また、「研究主題にせまる授業になっているか」を見取るための視点を「ポイント」として明記し、同じ視点で参観・協議が行えるようにしている。授業づくりを行う際には西部教育事務所から指導主事を招聘し、生徒の主体性を育む「課題設定」ができていないか、深い学びにつながる「対話や議論」が設定できているか等について指導案を検討し、指導・助言を受けた。1学期の取り組みを踏まえ、思考を深める授業の仕組みに課題が見られたことから「批判的思考を働かせる場面」を全教科で設定し、教科による見方・考え方をはたらかせながら考えを深めるための手立てとした。

②授業者の心構え自己チェック（毎月実施）

自己チェックシートは「授業スタンダード」や研究主題と対応したものになっている。毎月17項目について自己チェックを行い、教科会で課題についてどのように対策をすべきか確認している。自己チェックをすることによって授業改善に向かう意識を常に持ち続け、それを教科会で確認することによりタテ持ちの授業の質をそろえることを狙いとしている。今年度実施していく中で、授業規律への肯定評価は平均して高く、授業の質に関する項目やICTの活用に関する項目が低い傾向にあった。そこで、2学期に内容を見直し、重点項目のみに絞ったアンケート項目を作成した。

③授業評価アンケート（学期に1回）

学期末に各教科について生徒にアンケートをとっている。研究主題に関わる項目、生徒指導の三機能に関わる項目、ICTの活用に関わる項目の7つである。そして、6件法とし、5、6のみを肯定的評価とカウントすることとした。これは、各個人の肯定的評価を結果として出し、目標値に届いていない項目に関しては、教科会に持ち帰り対策や取組の確認を行うようにしている。

④教科実践レポート

全教科が重点単元を決め、新学習指導要領で求められている資質・能力の育成を目指した授業づくりを行い、その工夫点や成果・課題をレポートにまとめて年度末の校内研修で発表会を行い、共有している。昨年度に引き続き、教科で一つのレポートを作成した。教科会で作成する過程で、交流する場面が必要であり、その中でさらに取組や方向性の統一が図れるのではないかと狙いからである。

（2）効果的なタテ持ちの教科経営

①教科主任会（月2回）

主幹教諭が中心となって計画し、全教科体制で実施している。今年度は、思考を深めるための手立てを中心にまた、昨年度、単元の目標やめあてについて全教科で形式を統一して作成したものを修正しながら取り組んだ。教科主任会で話し合った内容については教科会で周知するようにしている。

また、主幹教諭が中心となり、「学力調査を軸にしたPDCA」を作成している。学力調査ごとに検証し、共有を図ることで、教科間のつながりを意識することができ、具体的にどのように取り組めばよいかも共有できている。それが、タテやヨコの機能のつながり強化となっている。



②授業を見合う取り組み

他教科の授業実践を自分の授業に生かすことや、ベテラン教員と若手教員のOJTをねらいとして、月に1回以上、他の教員の授業を参観している。参観者は授業参観カードに記入し、主幹教諭が統括し

授業者に還元し、その後教科会で共有し授業改善につなげている。

③単元の振り返り

単元の振り返りは、教科の専門用語を使うことや、本校の課題でもある「根拠に基づいた考えの表出」などを狙いとして全教科で取り組んでいる。授業での学びを生徒自身が整理し、アウトプットすることで学習内容の定着を図る。昨年度は200字で振り返りを行っていたが、今年度は振り返りの質に重点を置き、生徒の変容が見られる振り返りになっているかを基に授業改善を進めた。生徒の振り返りには具体的な評価を加え、他の生徒の参考になるように紹介している。

④チーム会の実施

若年教員の割合が多い。授業改善をすすめる上で、どの年代も力を発揮できるようチーム会を実施した。ミドル会はミドルの役割の自覚や若年教員へのサポート、メンター会は学校組織の理解や自主的な授業改善を目的とし、他教科の実践に学び教科横断的な視点を育成することを狙いとして実施している。

⑤アドバイザー訪問（年3回）

「組織力向上のための実践研究事業」として、西部教育事務所の松田アドバイザーに全授業を通覧していただき、授業改善、及び教科主任会の在り方について指導助言をいただいた。その内容は主幹教諭が次回の校内研修で周知し、教科主任会を通じて教科会で周知へ下ろすというPDCAサイクルを回した。

5. 今年度の成果と課題

授業者の心構え自己チェックを見てみると、4月は達成率が78.9%、9月81.3%、11月85.8%であった。若手の自己評価が低い傾向にあったが、教科会やメンター会など縦のつながりを通して学期を追うごとに評価が高まった。12月に実施された高知県学力定着状況調査については、自校採点の結果より、各教科で作成した分析シートをもとに全教員で共有を行い、各教科から見えた課題のある問題を解いた。そして、各教科での課題と、それに対応する取組も共有している。業者採点の結果からも1・2年生共に、5教科の平均が全国比+3P以上という目標値を超えることができた。

【成果】

- 「批判的思考をはたらかせる場面設定」によって思考を深める手立てとするなど、共通した取り組みを組織的に進める中で理解が深まった
- 研究主題にせまるICTの活用について研究が深まった
- 生徒の振り返りから考えの変容が見られた

【課題】

- 批判的思考を働かせて思考を深めることに加えICTの活用や個別最適な授業形態についての研究
- 教科による縦のつながりだけでなく教科の課題を学年間で共有するなど横のつながりとの連携
- 複数の資料を正確に読み取る力（県版学力調査自校分析）

これらの課題について、来年度に向けて組織としてどのように対策をしていくか検討する。来年度、これまで積み重ねてきた西中スタンダードをさらに発展させられるよう研究を続けていきたい。